

探梅行

森岡 正作

追儼打ち

大根干すつくづく土に生かされて
皆腹に一物ありてふぐと汁
枯菊を焚けりよき音よき香り
裸木に関節のあり指のあり
人日の猿にうつつを抜かしをり
しんがりは口笛上手し探梅行
抽選券三枚持ちて春隣

登四郎先生の「追儼打ち裏窓は声ひくくして」の御句に触れて、高校生時分を思い出した。兄や姉たちが家を出ていたので、受験生である未っ子の私が豆撒き役であった。両親のいる部屋の周りで大声を出すのは何とも気恥ずかしく、離れた場所とか玄関では受験の憂さと言つてもこじつけに過ぎないが、日頃発しないような大きな声が出た。最後は奥の間である。

正月の二、三日は来客の出入りもあつて賑やかであるが、大寒の頃は締め切つた小暗い奥の間である。先ず襖を開けると寒気がささつと動くように突き刺さつてくる。それまで自在に遊び回つていた座敷童でも隠れたのであるうか。次に左斜めの襖を開けてさらに縁側の硝子窓の戸を引くとざあつと寒風が入り込み、眼前に屋根から下ろされた雪の壁が現れる。部屋の中央に戻つて左右に豆を打ち、終いは少し気圧されたように低い声で「鬼は外」と雪の壁に豆を打ち付けると、音も無く雪に吸ひ込まれてゆく。しばらく静寂な時間が流れるのであるが、その間座敷童は部屋の隅か押入れに隠れて固唾を呑んでいたのである。今となつては夢物語である。